

經濟小説として読む『友情』

——顕示的消費としての恋愛——

八木澤 宗弘

はじめに

『友情』は、野島が恋愛と自らの理想を結びつけ、それをひたむきに追い求める小説である。しかし実際のテクストを見てみると、野島の立ち回りは一見精神世界に生きるようにすら見えるその思想とは程遠く、きわめて現実的に人間関係の中で地位を競い合うのみであり、恋愛対象をまるで地位を示す財として扱っているように読めるほどである。杉子や大宮など他の登場人物についても同様である。そこでこの論文では、仮に恋愛の駆け引きを経済学上の取引と見なして経済的な現象として見たなら、どのようなテクストとして立ち現れるのかといった思考実験を試みたい。

一般的に経済学というと、人間の心理の付け入る隙はないように感じられる。なぜなら、従来の経済学では仮定から演繹的に推論を重ねていくアプローチの仕方をとっていたため、そこで描かれる人間は計算上都合の良い、ホモ・エコノミカスと呼ばれる経済人であるからだ。ホモ・エコノミカスに人の血は通っておらず、あらゆる局面において十分に合理的で利己的である。しかし現実には生きる人間は常に十分に理性的で理論的とはいかず、感情に流された行動をとってしまうことの方が多いほどである。

そこで生まれたのが、その場の心理作用を考慮に入れ、より人間の行動に即した形で分析する行動経済学である。

『友情』に出てくる登場人物達の合理的でない振る舞いも、

行動経済学で扱われるプロスペクト理論を用いれば説明可能だろう。この論文では『友情』を、描かれる恋愛を経済的現象として読み替える、つまり経済小説として読むことを目的とする。なお、経済用語としての財は「人間の物質的・精神的的生活にとって何らかの効用があるもの」という意味があるが、本論においては容貌や社交性、経済力など他者と比較可能な諸要素に限定し、それらを総合して財力として扱う。

一章では、ハーヴェイ・ライベンシュタインのスノブ効果・バンドワゴン効果・ヴェブレン効果を用いて登場人物が恋愛対象を財として扱っている実態を明らかにし、第二章以下の分析の前提とした^{〔1〕}。

二章では、この恋愛をあくまで経済学上の現象であるとしながら、分不相応な恋に妄信的な野島と、獲得が容易い杉子に対して消極的な大宮という、二人の合理的とはいえない振る舞いに着目し、プロスペクト理論を使ってその理由を分析したい。プロスペクト理論とは、カーネマンとトベルスキーによって提唱されたもので、利益もしくは損益

および、それらの確率がある程度既知である状況下で、人ほどのような選択をするかを記述するものである。^{〔2〕}

三章では、大宮が結果的に手に入れた杉子という財の効用をより高めるためにとった行為として、同人雑誌による公開を意味づけたい。ここでは経済活動を行う大宮の行動に影響を及ぼすものとして、彼が身を置く「有閑階級」に着目する。^{〔3〕}

一 野島の恋と消費外部性

「男の注意を惹かないには美しすぎる」（上六）杉子は「誰にでもある点までは遠慮なく愛嬌を見せる質」（上二五）であるため、「友達つきあひの多い」（上六）仲田の形成するコミュニティにおいて様々な男性の注意を引き、露骨に讚美するのがやり出すほどではやされるように^{〔4〕}なる。

しかし野島はそういった類の駆け引きを「甘言や令色」（上七）として嫌悪し、「相手の意志がまるで加はらないで一人角力をとる恋もあるだらう。しかしそれは自然とは

思はないね」(上十)と、男性がお世辞などの露骨な態度によつて女性に気に入られようとする姿を忌み嫌う。野島が恋愛においてとらうとする態度は「自分は恋する女の為に卑しい真似はしたくない、自分を益々立派にしたく思ふだけだ、自分の妻になる人間に自分をあざむくことは凡そ耻かしいことだ、自分の真価を知つてくれて、それでもくくる気が出ない女そんな女は用はない」(上十八)という考えに表れており、そこからは自分の地位の向上によつて杉子に認められようとする理想がうかがえる。

しかしこの考えは同時にある問題を内包している。それは引用部の後半、「それでもくくる気が出ない女そんな女は用はない」の部分である。「自分は本当に偉くならなければすまない」(上十四)という決意に代表されるように、杉子を得るために野島が目指すのは小説家としての成功と精神的な成長だが、それを達成した上で自分の所に来ないのなら用はないと考えているところに注目すると、野島は必ず杉子を獲得しなくてはならないと考えているわけではなく、あくまで自分の地位に付随する称号程度に女性を扱っている実態が浮かび上がってしまうのである。

ハーヴェイ・ライベンシュタインは、消費者は財との一対一の対応でなく、他人の消費が与える外部性によつて財への欲望を上下させることを指摘し、それぞれの現象を「バンドワゴン効果」「スノブ効果」「ヴェブレン効果」と名付けた。野島が杉子を欲望する時、これらの効果が見られるならば、野島と杉子との関係は消費者と財との関係に回収することができるが、実際はどうであるか分析したい。

「バンドワゴン効果」とは、ある財の需要が高まったとき、他者の欲望を模倣することによつて自分もその財を欲望するという考えであり、『友情』においては野島が他者からの杉子の評価に影響されているところに当てはめることができる。

野島が杉子を好きになつたきっかけはその美貌である。直接逢う以前から写真を見て「皆の内では杉子は図ぬけて美しいばかりではなく、清い感じがしてゐた」(上二)と感じ、一日そばにいただけで満足に對話ができずとも結婚相手として意識してしまうほど、野島は杉子の美しさに惹かれる。

しかし杉子の容姿について、野島は「全体ばかり切りわから」ず、大宮や武子に杉子の爪や手を褒められても「さう云へばさうらしい」位に切りわからな（上十九）い。これは野島が「杉子の魂」や「杉子その人」、「その全体」（上十九）を愛そうとしているからだ、彼は自分では理解できなくとも、他者によって褒められた杉子の要素を「自慢の一つ」（上十九）と感じ、さらには「自分は矢張り杉子の心を愛してゐるのではなく、美貌と、身体と、声とか、形とかを愛してゐるのだと思つた」（上二十一）とまで感じるようになる。要素の良さに気付けなにもかかわらさう考へるのは、杉子の財としての価値に重きを置いてゐるからであり、そこに他者が褒めるものだから良い物であるはずだと考へる「バンドワゴン効果」が現れている。

「スノブ効果」とは、他人とは違うものが欲しいという心理の働きによつて、ある財の需要が増したとき、稀少性が薄れることでその財への欲望が減少するものである。同様の心理によつて、逆に希少性を感じる財に対しては需要の少なさにかかわらず欲望するようになる。

杉子に恋をしている野島は、日本の女を悪く言うものに対して「君達はまだ本當の日本の女をみたことがないからだ。見ればもうそんなこと（日本の女の悪口・引用者注）は云へなくなる」と、自分は「滅多に逢ふことの出来ない」（上七）美しい人に出会うことができたことを誇る。大宮が野島に杉子の評判を話す場面でも、野島は「あの女の美しさはさう他の奴にはわからないさ」（上十）と、自分が杉子の本當の美しさに気付くことのできる数少ない人間だと自負している。これは「スノブ効果」に他ならず、自分だけが価値を理解しているという稀少性が、杉子への欲望を増加させるのだ。ここでいう美しさとは、彼女の無垢な様子や振る舞いなどである。

彼はそれを理想的に解釈した。すなほで、親切で、利口で、快活で、不正なことを気がつかない顔して正しくする術を心得てゐる。彼はさう思つた。何処にこんな無垢な美しい清い、思ひやりのある、愛らしい女がゐるか。へ中略へ彼女はよく笑ふ。その笑ひの無邪気さよ。（上

野島は誰にでも評価できる杉子の美貌だけでなく、その性質を評価することで、自分を一般的な男性は知ることのできない女性の美しさに気付く希少な人物だと考え、優越感を抱いていることがわかる。

以上からわかるのは、野島は杉子の容姿については「バンドワゴン効果」によって、性質については「スノブ効果」によってその欲望を増しているという事実だ。この経済上の効果と楽観的な性格が相まって、野島は杉子をますます欲望していくのである。なお、野島が杉子との恋愛において楽観的になる仕組みは次章で取り上げる。

そして「ヴェブレン効果」である。「ヴェブレン効果」とは、ソースティン・ヴェブレンが『有閑階級の理論』において以下のように提示した顕示的消費を踏まえて名付けられた経済用語だ。^[5]

半平和的な有閑紳士は、生活のために必要な最小限度以上の生活物資を消費するばかりでなく、またかれの消費は、消費する財貨の質にかんしてもひとつの特種化を

うける。かれは食物、飲料、麻醉物、住居、労務、装飾品、衣料、武器装具、娯楽、護符、および偶像もしくは神体などを、ふんだんに、またいちばんよいものを消費する。かれの消費する品物についておこってくる漸次的な改良の過程での、確信の推進的原理なり、直接の目的なりは、疑うまでもなく、改良され、いっそう洗練された生産物は、そのひとの快楽や福祉のために、いっそう役立つということである。しかし、それは必ずしも、それらのものが消費される全部の目的であるわけではない。世評という基準があつて、それが、その標準にてらしてみて、永く残るにふさわしいような革新をとり上げる。これらの、いっそうすぐれた財貨を消費することは、富の証拠であるから、それは尊敬されることとなる。その反対に、しかるべき量と質とを消費することができないということとは、劣等と無力の烙印となる。^[6]

ヴェブレンは、生活の不安が解消された有閑階級は、自分が有閑であることを示すためにあえて人間生活や人間の福祉に役立たない支出をして、浪費の成果を見せびらかそ

うとする顕示的消費を行うと論じた。「ヴェブレン効果」とは、財の価格が上昇したとき、一般的には需要が減少するところが、それを手にしたとき可能となる地位の誇示や「見せびらかし」のために需要が増すことがあるというものだ。

野島が困難にもかかわらず杉子を欲する理由もここにある。杉子を取り巻く男達の間でも「バンドワゴン効果」は起こって杉子の需要はますます高まるはずだが、杉子は一入しかないために供給とのバランスが崩れ、自分と同じく欲望する恋敵から勝ち取らなくてはならないという意味で杉子の価格が上昇する。しかし杉子を手に入れることが困難であればあるほど、つまり手間をかければ手間をかけるほど、手に入れたときの達成感と地位の上昇効果という点での財の効用は増すのだ。野島は自らの地位を向上させて杉子を振り向かせ、それを見せびらかすことによつて、さらなる地位の誇示を図ろうとしたのだ。

先行研究で石井三恵や楊琇媚が指摘しているように、野島は杉子をそもそも一人の女性として見ておらず、自分の妻になるべき存在として認識していることがわかってい

野島は妻として自分を支え慰める存在として、他者からの評価によつて価値が保証された杉子を得て、他者に対する「見せびらかし」を目論んでいるのだ。そのとき重要なのはあくまで他者からの評価であり、自分が価値を見出せないとしても、他者からの評価が高ければ「見せびらかし」は成功する。杉子の美しい要素がわからないのに「自慢」と感じるのもこのためである。野島は杉子を得る前から「誰かに杉子のことを讚美して話したい気にな」(上四)るほど、見せびらかしたいのだ。

「ヴェブレン効果」は有閑階級以外にも適用できるものだが、作中人物の野島や大宮が実際に有閑階級であることは重要である。なぜなら彼らは生産的労働を免除され、食うに困らず、それを前提として脚本家や作家であることができるという意味で有閑階級であり、「有閑階級の理論」を当てはめることが可能だからだ。大宮はすでに自らの地位をある程度確立しており、杉子による「見せびらかし」への欲求は野島ほど切実ではないようにも見える。しかし、有閑階級は顕示的消費の効率を上げるために代行的消費者に妻を選び、贅沢をさせることによつて地位と財力を誇示

するため、大宮も見せびらかすのに相応しい女性を必要とするのだ。実際に杉子を獲得した大宮はそれを効果的に見せびらかすのだが、それについては三章で触れる。

以上の分析から、『友情』の恋愛における野島の振る舞いには市場原理がそのまま当てはまり、彼が恋愛対象を財とみなしている実態が明らかになった。これを経済学上の取引と捉えることが可能だろう。そしてその心理は、浪費という合理的でない消費に代表されるように、自らの置かれる制度など外部の影響を受けやすいものなのである。

二 恋に積極的な野島、消極的な大宮

『友情』の上篇を通して、野島は杉子に恋をしてそれに邁進するが、下篇で明かされるように、大宮は自らの恋心を隠蔽する方向に振る舞っている。恋に積極的な野島と、消極的な大宮。ともに杉子を必要としていたのは前章で確認したとおりだが、その二人の態度の差はどうして生まれたのだろうか。ここで重要なのは杉子という財の獲得確率にかかると、恋愛に取り組む二人の姿勢の違いで

ある。この章では行動経済学で重要なプロスペクト理論の中から、前者に関わる確率加重関数と後者に関わる価値関数とを用いて分析を試みたい。

確率加重関数とは、従来の期待効用理論では確率と結果の効用とを掛け合わせることによって期待効用が計算できていたものを、実は確率は意思決定する人によってそのまま受け取られはせずに違った重みで受け取られるとし、その加重された確率を関数化したものである。人は自分の損得に関わる確率を考えると、実際の確率をそのまま捉えることが困難なのである。

そして価値関数とは、人は財の増減に対して絶対量ではなく相対的な損得を重視するというものだ。二人が杉子という財に対して感じる価値は、参照点と呼ばれる価値判断の規準（ここでは恋愛に取り組む際の二人の諸条件）に大きく左右される。そして二人の参照点の違いは、すでに保有している財の差に現れる。すでに容貌も経済力も資質も社会的地位も持っている大宮と、大宮に思想を認められていない何も持っていない野島では、杉子を獲得したときの相

対的な利得の量が変わってくるのである。これが二人の積極性に大きく関わっていると考えられる。

確率加重関数によると、人は確率が一に近い場合、それを実際の確率より低く見積もってリスクを避ける傾向にあるが、逆にその確率が低い場合、実際の確率より高く誤解してしまう傾向にある。恋愛が成就する確率について考えた場合、そもそも「自分に彼女の夫となる資格があるとは思へなかつた」(上十五)と考えているように、野島は早川の持つ要素の方が自分より杉子に相応しいと考え、自分が不自然なくらい痩せているのを反省したり(上二十)、「僕(野島引用者注)より君(大宮引用者注)を尊敬してゐるかも知れないよ」(上二十四)と大宮の方が尊敬されていると考えたり、杉子に相応しい人物像を想定した上で、それと自分の現状が大きく離れていることを知っている。

つまり恋愛の成功率が低いことを知っているのだが、バイアスがかかっているせいで彼はその確率を高く見誤り、結果的に自分を過大評価してしまうのだ。野島には人に誇れる要素がないだけに、杉子を手に入れることよって得られる効用は絶大である。そもそも確率が少ないことから

考えてもリスクは少なく、野島は脇目もふらずに杉子を欲望することができる。それどころか野島は損失回避性によって、失恋する損失の確定を先延ばしにしようため、実際の行動に移せなくとも恋愛を続ける必要があるのだ。⁽¹⁰⁾これが、野島が積極性を発揮する所以である。

一方、大宮はすでにある程度の地位を手にはしているので、杉子を手に入れることによる効用は野島よりも少ないだろう。その点において、野島と比べて杉子という財に対する積極性が少なくなるのは必然である。大宮は自分の方が野島よりも杉子から尊敬されていることを自覚するなど、杉子との恋愛を成就させるのは容易かつたかもしれない(下九)。しかしその場合でも、理論的には一に近い確率は一でない限り減少方向にバイアスがかかるため、大宮は利得に対してリスク回避的に振る舞ってしまう可能性が考えられる。実際に、大宮は杉子に好意を抱きながらも行動に移すことはなかつた。

しかし、大宮はやがて「その女が自分に本当に厚意をもつてゐることを知つた」(下九)と、財を獲得できる確率が一になってしまったことを知る。それにもかかわらず、

確率の問題が解消された以降も杉子と目があうのを「こぼもうと」（下九）したり、「意識的には出来るだけその女をさけ」（下九）たりと、大宮は消極的に振る舞う。これはなぜだろうか。価値関数に表されている考え方には、リスクがない確実な場合においても適用されるものがあるのだ。その際大宮の前に立ちふさがる障害が、「保有効果」である。

大宮と野島とでは、杉子を手に入れる前提に大きな違いがあったのだ。それは、野島という財を参照点に含めるか否かである。参照点に欲望する財との共存が難しい財が含まれるとき、ここにセイラーが命名した「保有効果」が発生する。

保有効果は、人があるもの（権利や自然環境、経済状態、健康状態なども含む）を手放す代償として受け取ることを望む最小の値、すなわち受取意思額（WTA）と、それを手に入れるために支払ってもよいと考える最大の値、すなわち支払意思額（WTP）が乖離することを意味する。

つまり、自分の保有しているものを手放すことの代償として要求する額は、それを持っていない場合に入手するために支払ってもよいと考える額より大きいのである。^[1]

大宮がすでに保有していて、杉子を手に入れるために代償として手放さなくてはならないのが野島である。大宮は杉子だけでなく、野島をも財とみなしているのだ。そのため杉子と野島という二つの財を天秤にかける必要がある。それが「保有効果」である。しかし、ここで疑問が一つ持ち上がる。それは、野島には財としての価値がどれだけあるのかというものだ。テキストを見る限り、野島は思想を除いた全ての要素において大宮に劣っている。野島と付き合うことによって、大宮にはどのようなメリットがあるのだろうか。

それは野島と付き合う大宮の姿が他者にどう映るかに注目すると明らかになるだろう。例えば仲田の家で行われたピンポン大会で、大宮は運動神経のない野島に代わって試

合をし、その實力を見せる。それに対して杉子が抱いた感想に、以下のようなものがある。

あなたの義侠心と男らしさと、女に媚びるものに対する怒りと、其処に又私をひそかにいたはつて下さつた御心づかひとを私はちやんと感じてをりました。(下八)

杉子は、大宮の振る舞いに義侠心を感じていたのだ。義侠心つまり「弱者が苦しむのを許せない心」は、弱者である野島がいて初めて発現するものである。野島を庇うことによって大宮は義侠心の持ち主になることができた。「妾(杉子引用者注)、あんなに友情の厚い方を見たのは始めてよ」(上三十二)と賞賛されるなど、大宮は野島と付き合うことによって、その評価を高めていく。大宮は「友(野島引用者注)の幸福の為に働き」(下九)ながら、「反つて自分をその女(杉子引用者注)に立派に見せることに役立てた」(下九)のだ。

大宮は、野島が自分より若く様々な要素で劣っているにも拘らず、有閑紳士に求められる眼識によってまだ目の

を見ていない才能を見出して付き合ひ、励まし続け、時には庇うような振る舞いを見せる。ピンポン大会で野島を庇ひ、その代わりに試合をして實力を見せつける場面に象徴されているように、大宮と野島は庇護関係にあつたと言ふことができる。野島の庇護にかけける時間と努力こそが、大宮のあまりある財力を顕示するのだ。夫の代行的消費者として閑暇・消費の役割を担いながら美しさに磨きをかける妻と同様に、野島も大宮にとっては財力を誇示するために有用な財なのである。杉子と決定的に異なるのは、この財はずでに大宮が保有しているという点だ。

「僕は二つの間に立つた。僕はどつちかを失はなければならぬ」(下九)と考え、「僕は親友の恋してゐる女を横取りには出来ません。それは友を売ることです」(下七)と言うように、大宮は杉子を獲得するためには野島を売却しなくてはならないと考えている。そして「保有効果」によつて、すでに保有している野島という財を、それを持つていなかった場合の価値よりずっと高く評価してしまうのだ。^{「12」}野島は、杉子との恋愛が大宮との関係に影響を与えるとは考えてもいないために大宮との関係を検討に入れずにすむ。

しかし、大宮は野島の恋心を知っているだけに、得恋は同時に野島からの女の掠奪につながり、杉子を優先した場合には失ってしまうであろう要素の一つとして、野島との関係参照点に加えなくてはならない。大宮はすでに持っている野島という財を捨てることに対して、必要以上に抵抗を覚えるのだ。

「私のこの願ひをどうか、友情と云ふ石で、たゞきつづさないで下さい」（下五）という杉子の訴えにもあるように、「保有効果」がある限り、杉子と野島の財としての価値の差を埋めるのは難しいだろう。しかしテキストでは、最終的に大宮は杉子を獲得するに至る。これはなぜだろうか。それは「段々女を失ふことのつらさが強くなつて来た」（下九）や、「俺はもう女を失なふわけにはゆかない。お互に愛してゐる」（下九）などの言葉に表れている。これらの言葉の中にある「失ふ」という語はすでに保有しているものに對して使うものである。ここから浮かび上がるのは、大宮が杉子を保有していると考えている事実である。大宮は「思ひがけなく」（下九）手紙を受け取り、杉子の厚意を知ることによって、はじめは新たに手に入れるべき財であ

ると考えていた杉子を、徐々にすでに保有しているものとして捉えなおすのだ。これが取引によって獲得したものであることは、次の記述から読み取ることができる。

俺（大宮引用者注）のわきには天使（杉子引用者注）が居て、俺をなぐさめ、俺に勇気を与へてくれる。それはすべて自分の力で得たのではない。意識して生み出したものではない。天与のものだ。（下九）

「保有効果」は主体的に選択して勝ち取ったものでなく、与えられた財や既得権の所有に對しても作用する。杉子は天から与えられたものであるという考えが介入することによって、大宮の「野島を代償に杉子を得るか否か」という問題は、「保有している杉子と野島のうち、どちらを優先するか」という問題に置き換えられるのだ。杉子を新たに得るものとし、野島をすでに保有しているものとして天秤にかけてときは、大宮は既得財である野島を優先させた。しかし、両者を保有している状態で、そのどちらかを選びどちらかを捨てるという選択となると、杉子にも「保有効果」

が付加されることになり、「保有効果」の影響による優劣はなくなる。杉子と野島はどちらも大宮の財力を顕示するために用いられる財として、対等の立場で選ばれることになるのだ。

杉子が野島か。二者択一を迫られた大宮は、最終的に杉子を選択する。しかし、その後大宮が取った行動は、下篇に表れているように、手紙の応酬を含めた全ての経緯を小説として構成して公開することであった。この行動にはどのような意図があったのだろうか、次章で分析したい。

三 誰に見せびらかしたいのか

一章で見たように、有閑階級は顕示的消費によって財力を誇示するが、有閑紳士が自分の地位を顕示するために行うのは浪費だけではない。彼らは自分が生産的労働を免除されていることを示すために生産的でない時間をすごしたり（顕示的閑暇）、有閑階級が起こった初期の野蛮時代——武勇と掠奪生活の時代——に属する特性、習慣および理想を顕示したり、それを評価する価値観を保存しようとしたり

する（有閑階級と野蛮な習慣との連関については、脚注を参照されたい）。掠奪的傾向や習慣は本来戦争によって発揮されるものだが、防衛戦争以外では戦争に対してむしろ嫌忌の感を抱く下層の階級にも戦争に憧れる価値観をおしつけるために、その機会は決闘やスポーツに置き換わっていった。このように、有閑紳士は自分が有閑階級に属することを示すために、あらゆる手段を使って自らの財力を誇示するので。

大宮は作家という非生産的な仕事をしており、海外に留学するほどの経済力と時間を持っているという点で有閑階級に属しているといえる。この章では、大宮が杉子を獲得した後に行った「見せびらかし」について分析していきたい。

大宮は杉子を手に入れるにあたって、獲得への積極的な活動ではないにしろ、「友達に払ふものは払った」（下九）と自ら言うほど、野島の恋愛を優先させる振る舞いや配慮に多大な労力を費やした。その結果、杉子と野島という二つの財をめぐる葛藤を経て、杉子という入手難易度の高い親友の恋人を掠奪したのだ。掠奪に至る過程は小説に全て

書かれており、それをありのままに公開することは、杉子によつて語られる自分の魅力と共に、大宮の費やした時間と労力を具体的に示すことにほかならない。掠奪の経緯が書かれた小説は大宮の持つ財力を雄弁に語るのだ。

大宮が小説として手紙を公開する意図は、その小説内で次のように書かれている。

自分は二人の手紙をこゝに公にする。そして君（野島）引用者注の面前にそれをさしつける。事実をそのまゝさしつける。自分は君の神経をいたわつてこの二人の手紙をかきなほして、君に見てもらはうかと思つた。しかしそれは反つて君を侮辱することを知つた。自分は君を尊敬してゐる。君は打ちくだかれ、ば打ちくだかれる程、偉大なる人間として、起き上つてくれることを僕は信じてゐる。そして露骨に事実を示せば、君は反つて怒ることによつて悲しみに打ちかつてくれると思ふ。（下十一）

野島を傷つけることによつて、結果的に成長を促そうという意図をここから読み取ることができる。しかし、大宮の意図が本当にそこにのみあつたならば、手紙の応酬を野島に公開するだけで事足りるはずである。なぜ手紙を「公にする」必要があつたのだろうか。

大宮は小説を同人雑誌に載せて公開した。その結果、たしかに野島は失恋の痛手だけでなく、自分の恋心が杉子にとつて「ありがた迷惑」（下三）であり、「野島さまのわきには、一時間以上は居たくない」（下二）ことを暴露されてしまうという辱めを受けながら、健気にも大宮の思惑どおり杉子を完全に諦めて一人で精進することを誓つた。しかし、小説を公開した効果は野島を辱めるにとどまらない。同人雑誌は、大宮にとって最も効率よく「見せびらかし効果」を發揮するのである。その相手とは、雑誌の読者である。

この同人雑誌は「大宮を尊敬する人々によつて出されてゐる」（上三五）。つまり、想定される読者は文学に携わり、なおかつ大宮の影響を受けやすい同人達（とその周辺の人々）である。自分の蛮勇を見せびらかす際、これほど効

果的な相手は他にいるだろうか。大宮は公開の際に同人雑誌という媒体を選択することによって、同じ分野の仲間でありながら自分より地位の低い同人全員に、「海外留学という、莫大な経済力を必要とし生産的でないという意味で閑暇と呼べる期間に、自ら積極的に動いたわけでもないのに財を天から与えられ、結果それが掠奪に繋がる」という、まさに搾取階級である自分の立場を誇示するのに相応しい、財力と閑暇と蛮勇の証である恋の過程を見事に見せびらすことに成功したのである。

手紙のやりとりという形式を取ってはいるが、大宮が構成して発表した時点で、これは大宮の小説となることは重要だ。手紙の中には大宮の野島に対する配慮が多く書かれているように見えるが、小説としてみると、大宮が野島を褒めれば褒めるほど、杉子に野島以上に尊敬される人物として魅力が増すという構図が見えてくる。愛する女を譲るために自分の気持ちに嘘をつきながら野島を庇い、女を掠奪した後も野島が絶望してしまわないように激励し、前を向かせる。ここから浮かび上がる大宮像は、友情に厚い男だろう。しかし、それを公開することによって「見せびら

かし」を目論んだ作者大宮に注意して捉え直してみると、友情以外の関係が見えてくる。それは二章でも触れた、大宮と野島の庇護関係である。上篇に見られたこの関係が、下篇の小説内にも見ることができるとだ。

財貨の生産にたずさわる奴隷を所有し維持すること

は、富や武勇の証明となるが、なにものを生産しない召使をかかえていることは、さらにいつそう高い富や地位の証明となる。¹⁴

野島は大宮の庇護を受けながらも世間的に認められないという意味で、大宮の代行的閑暇を担い、大宮の能力を証明する存在としてあった。しかし恋愛において、野島はそれと知らずに大宮と同じ相手を欲望してしまった。大宮の心理の変遷は二章で見た通りだが、「友が死んでくれたら」（下九）と思わせるほどに、野島の恋愛は大宮の余裕を失わせた。そこに大宮の財力の限界を見ることができると。野島の行動は、大宮と野島の関係にも変化をもたらしたと言える。

庇護対象者に立場を脅かされた大宮は、野島との決定的な差を確認させなければならぬ。それは本人に対してだけでは十分でない。野島は確率加重関数によって、いつ自分の力量を見誤るかわからないからだ。野島との立場の違いを可視化させるためにも、大宮は不特定多数に小説を公開する必要があったのだ。そしてそれは見事に行われた。

おわりに

心情の機微がその骨子をなす恋愛を、あくまで恋愛対象を財と割り切った経済活動と読み換えて分析することは、従来の標準的経済学では不可能であった。なぜなら『友情』の登場人物に限らず、そういう設定がない限り、標準的経済学の前提とされている「認知や判断に関して完全に合理的であつて意志は固く、しかももっぱら自分の物質的利益のみを追求する」経済人は存在しえないからだ。しかし、人間の心理に行動原理を見出すタイプの経済学が発展することによって、経済学上の理論が及ぶ範囲は取引から一般的な行動へと敷衍していくことだろう。

今回の分析で明らかになったのは、財力を持っている大宮と持っていない野島という二人の立場の違いが行動に及ぼした影響で、それが恋愛の行方に大きく関わるといふ、ある意味で残酷な結果である。しかし、野島は何もできなかったわけではない。大宮と同じ相手を欲望することで、大宮の葛藤を引き出し、それまで自分を庇うのみだった相手に酷い仕打ちをさせるに至ったのだ。

上下の比較というものは、そのひとが金銭的名声のための闘争において、もはや競争相手に比べてさらにいっそう自分を高く位置づけることをよろこばなくなるくらいに、そのひとにとって有利ということとは、けつしてない。

野島からの掠奪という行動を振り返ってなお、「反つて今後の『彼』がこわい。しかし自分も負けてはゐないつもりだ」(下九)と、今後の仕事に繋げようとする大宮の野心はとどまることを知らない。しかし、「君にたいして友情を失ひはしない」(下十二)と言う大宮に対して、野島

はようやく「死んでも君達には同情してもらいたくない。僕は一人に耐へる」(下十二)と、大宮の庇護からの独立を宣言することができたのだ。彼の仕事はこれからである。

【注】

- 1 ハーヴェイ・ライベンシュタイン「消費者受容理論におけるバンドワゴン効果、スノブ効果、及びヴェブレン効果」(『The Quarterly Journal of Economics』(1950) 64 (2): 183-207.)
- 2 Kahneman, Daniel, and Amos Tversky "Prospect Theory: An Analysis of Decision under Risk" (『Econometrica』(1979) 47: 263-291.)
- 3 ソースティン・ヴェブレン『有閑階級の理論』(小原敬士訳、一九六一・五、岩波書店)
- 4 『友情』本文からの引用の全ては武者小路実篤『友情』(『武者小路実篤全集』第五巻、一九八八・八、小学館)によった。ただし、論文中に見られる「(上二)」は「上篇」の「一」を示す。
- 5 前出『有閑階級の理論』
- 6 前出『有閑階級の理論』

7 杉子を一人の女性としてではなく、妻として扱ってしまったことにについては、すでに石井三恵が『友情』にみられるジエンダー視点——鼎坐に位置する登場人物』(『日本文芸学』三六号、二〇〇〇・三)で、楊琇媚が「武者小路実篤『友情』論——作中人物におけるジエンダー言説に注目して——」(『国文学攷』一八四号、二〇〇四・一二)で指摘している。

8 この場合の「生産的労働」とは、ヴェブレンによれば「筋肉労働、勤労など、およそ生活資料の獲得という日常の仕事に直接かわること」を指し、それは劣等な階級の独特の職業であるとされている。「そのようなあらゆる生産的職業から免除されるばかりでなく、慣習の掟によって、そのような職業をもつことを禁じられる」階級が有閑階級であり、彼らは「非生産的な労働」に従事する。

9 代行的消費者とは、有閑紳士が自分の富と消費能力を誇示するために、より効率良く浪費するために消費を代行された者である。饗宴に招かれた客、贈物を贈る相手、豪華な衣装を身に纏う婦人などがこれにあたる。

10 損失回避性とは、人間は同額の利得による快樂と損失による苦痛を比較したとき、苦痛の方を大きく感じてしまうためそれ

を回避する方向に振る舞うという性質で、この場合失恋が損失を確定させる。

1 1 友野典男『行動経済学 経済は「感情」で動いている』（二〇〇六・五、光文社新書）

1 2 ホロウィッツとマコーネルがこれまでの研究を総括して出した結論 (Horowitz, J. K. and K. E. McConnell "A Review of

WTA/WTP Studies" (『Journal of Environmental Economics and Management』(2002) 44:426-447.) によると、WTAはWTDの約七倍であり、これは市場で取引されていない非市場財である場合、さらに差は広がる。

1 3 『有閑階級の理論』によると、有閑階級の制度が発達したのは、封建時代のヨーロッパや封建時代の日本のような野蛮文化の比較的高い場合である。これらの国では諸階級の区別が厳重であり、それぞれの階級に固有な職業の区別によって、階級の差別が行われてきた。すべての封建社会の名誉ある職業のうち主要なものは戦争であったため、軍人の持つ野蛮な習慣は、その地位を特徴づけるものとして保持されてきたのである。

1 4 前出『有閑階級の理論』

1 5 前出『行動経済学 経済は「感情」で動いている』

1 6 前出『有閑階級の理論』

※本稿において引用した「友情」本文の校正・仮名遣いは『武者小路実篤全集 第五卷』（小学館、一九八八・八）に拠る。